

平和と秩序 意義探る

1920年代に国際連盟で活躍し、紛争の法的解決を目指し設立された常設国際司法裁判所（PCIJ）でアジア人初の所長を務めた外交官、国際法学者の安達峰一郎（1886～1934年）の業績をたどり、その現代的な意義を探るシンポジウム「よみがえる安達峰一郎 世界が称賛した国際人に学ぶ」が15日、東京・四ツ谷で行われ、国際法の研究者や一般の歴史ファンなど約200人が参加した。

選『世界万国の平和を期して』（東京大学出版会）の編者柳原正治・放送大学教授が基調講演を行った。

柳原氏は「安達は国際社会の現実在即した国際法の姿を求め、各国の利益と国際利益の相克の可能性を踏まえつつ、平和をいかに実現すべきか考え続けた。これは現代の学者、外交官、政治家にとっても非常に大きな課題」と述べ、今日の不安定な国際情勢に示唆を与える、安達思想・行動の重要性を強調した。

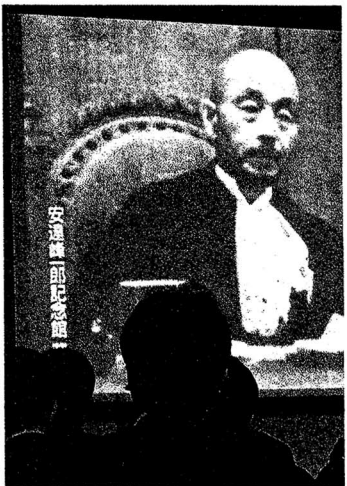
生誕150周年にちなむシンポジウムは、安達の妻鏡子が創立し、来年60周年を迎える公益財団法人「安達峰一郎記念財団」（鈴木正貢理事長）が主催。来賓の秋葉剛男・外務事務次官が「（安達は）世界の平和と国際秩序の形成、そして今日に引き継がれる国際裁判のルール作りに深く関わった真の国際人だった」とあいさつした後、先月末に刊行された初の著作

「選『世界万国の平和を期して』（東京大学出版会）」の編者柳原正治・放送大学教授が基調講演を行った。

【井上卓弥】

安達峰一郎 生誕150周年シンポジウム

Topics



シンポジウム冒頭、記録番組を見る参加者ら。安達峰一郎記念財団提供